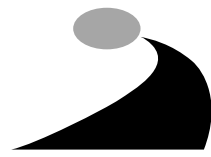


秋田県立大学 図書館だより



No. 7 2003.7

》》》》》》》》》 目次 《《《《《《《《《

「図書・情報」思いつくままに 図書・情報センター長 菊地 勝弘	1
図書館に行こう！ 図書・情報委員会委員 稲元 民夫	4
利用案内： 総合目録データベースを使う	5
雑誌の製本作業について 夏季休業中の図書館	8



「図書・情報」思いつくままに

図書・情報センター長 菊地 勝弘

(生物資源科学部生物環境科学科教授)

この4月、私の所属する生物資源科学部にも大学院ができ、生物資源科学研究科としてスタートした。学部新生とはまた別の輝きを持った院生を見ると、四十数年も前の自分のことが思い出される。

[最初のゼミナール]

1957年4月、北海道大学大学院理学研究科に先行する数学、物理学、化学専攻等に追随する形で、地球物理学専攻がスタートした。4講座に7名の院生だったが、その内私の所属する気象学講座は2名で、特に入学式等というものが

無いまま、直ぐにゼミが始まった。物理学専攻のA助教授による「低温物理学特論（I）」は、水の凍結や凍上機構が専門だったこともあって、教科書は熱伝導に関するアメリカ・マサチューセッツ工科大学（MIT）物理学科教授のJ.C. Slaterの「Chemical Physics（物理化学）」（521pp）が使われることになった。この本は、当時の理学部図書室には勿論北大中央図書館にも無かった。コピー機など無い時代であったから、A助教授はすかさず近い将来英語で論文を書くことになるだろうから、そのトレーニングとして最も手っ取り早い方法は、教科書を書写

することであると言って教科書を貸して下さった。自分が担当するであろう分の3ページ位を急いで書き写すことが続いた。しかし、この教科書は修士1年目の学生には難しく、1年を終えた時には50ページも進まなかった。

M教授の「気象学特論 (I)」は、イギリス・ダーハム大学物理学科教授のA.J.Chalmersの「Atmospheric Electricity (大気電気学)」が使われた。この本も直ぐには入手が難しく、教授秘書のM嬢と私たち二人が交代でこの本をコピーすることになった。当時、コピーするという事は、暗室に入って、先ず教科書1ページずつをカメラで撮影し、フィルムを現像、定着、水洗、乾燥させた後、キャビネ版の複写用印画紙に引き伸ばしてやっと1ページのコピーが出来上がるといった具合だった。そんなわけで、院生になって最初にマスターし、自慢できる技術はD.P.E.だった。そんなこんなで、ゼミをする前の行程に大変手間取ることが多かった。

[コロキウム・学会発表]

この2月、第1回目の卒業研究発表会を3学科とも聴かせて貰った。と言うより、見せて貰ったと言うのが本当のところだが。どの学科も全員がパワーポイントを使った綺麗なディスプレイで私たちの頃とは隔世の感があった。

当時は、幅60cm×長さ90cmの模造紙に毛筆書きだった。そのビラ(ポスター)をT字形の木枠に画鋏で止め、その木枠を黒板の上に引っ掛けて、吊す方法がとられた。そのため、黒板の上には何本もの太く、長い釘が打ってあった。模造紙に実験や観測結果の図を毛筆でより正確に書くのは大変な作業だった。毛筆から多色のマジックインクに代わったのは画期的なことだった。その後、学会発表などでモノクロスライドが使われるようになった。モノクロスライド作りは、先ず原図をカメラで撮影してネガを作り、そのフィルムを引伸機に入れて、レンズを外したカメラにミラックスなるアダプターをつけ(一眼レフは当時はまだなかった)、再度撮影し

てポジの画像のスライドが出来ると言った具合である。

風景写真や国際学会のカラースライドが見られるようになったのは1960年代前半からだった。当時、北大理学部で先生方で真っ先に講義やゼミにカラースライドを使ったのは物理学科の中谷吉郎先生だった。先生は早くから欧米の学者、研究者との交流があり、年間何度も外国を往復していた。先生の帰国を待ちわびたのは、綺麗なカラースライドが楽しみだったからでもある。もっとも、この頃のカラーフィルムはアメリカのコダクロームかエクタクロームに限られており、撮影済みのカラーフィルムの現像はアメリカに送って行われたので、最も近距離のホノルルでも、手元に戻ってくるまでには一ヶ月を要した。

私たちの講座の学会発表のスライドや論文の図面は、手先の器用さを買われて私が描いていた。定規を使える直線以外は英字も曲線も全てフリーハンドだった。それから雲形定規や自在定規が使われるようになった。英字もロットリングやスクリーントーンを使うといった簡便な方法に変わっていった。学会の会場に入って、論文の内容を聴かなくても、スライドが綺麗だったら北大グループの研究だと言われて得意満面だった。よく、スライドやポスターの出来具合の善し悪しは別として、内容で勝負だと言う人がいるけれど、矢張り、綺麗で見やすく、説得力のある図面は、内容以上の何かを視聴者に与えてくれるものである。今の時代、誰が作っても使うソフトの種類を除けば、それ程スライドに個性が無くなったとも言える。こんな時だからこそ、本当の意味での内容が問われることになるのであろう。私たちの院生の頃を思うと正に浦島太郎の感すらする。これからの10年、20年後はどのような変貌を遂げるのであろうか? あっ、浦島太郎って どんな研究をした人だったっけと言われそうだ。

[研究情報の発信、収集]

さて、話を今の私たちの身近な研究事情に眼を移してみよう。

欧米の学会誌は今や急速な勢いで電子化されつつあるという。しかし、ここで一寸考えさせられることが無い訳でもない。友人から聞いた話だが、院生の最新の研究成果が電子ジャーナルに載ったと言って別刷代わりにCD-ROMを一枚謹呈されたという。然るべくジャーナルに載ったということなので、内容はそれなりであったようだが、この論文はこの形で、20年後、50年後に読まれることがあるだろうかとの友人の問いに、その場に居合わせた殆どの院生は、その頃は多分パソコンの形態がすっかり変わっているだろうから、先ず無理だろうという答えが返ってきたという。論文の内容の善し悪し以前の問題として、これは由々しきことではないかというわけである。日本の古い文献が、和紙と墨筆で千年以上も保たれているということを思うと、何か考えさせられるのである。

一方、情報収集の一端をみると、もう十年近くも前から私たちの分野で最も大気現象の変化を理解するのに使ってきた気象庁発行のB-3サイズの印刷天気図（一ヶ月分200ページ位）が全てCD-ROM化したことである。確かに、このサイズの一ヶ月の分量は、サイズの大きさ、重さ、保管のいずれも、使用しない時の煩わしさは何とかして欲しいと思ったものだった。しかし、私の世代、連続した日の天気図を動画紙芝居よろしくパラパラと捲って、成る程、成る程とやれないのが何とも歯がゆい気がするのも事実である。便利さ、都合の良さが全てなのだろうか？一寸考えさせられるのである。

[図書館の効用]

先日、暫くぶりに100万冊を超える蔵書を有する某大学の図書館を訪ね、カード検索をする羽目になった。OPACやインターネット検索に慣れた人達にとっては、一寸異様な雰囲気を感じると同時に、カードとカードの間からしみ出

てくるような紙の匂い（黴の匂い）にふと懐かしさも感じた。そういえば、我が秋田県立大学図書館には、この検索カードボックスが無いのに気がついた。受付カウンターがスッキリして広々としているのは、これらのボックスが無いのと、ものすごく分厚い学術雑誌総合目録の多くが書架の方に移されていることであろう。

私は図書館の効用として、ストレス解消、気分転換もあると思っている。新刊雑誌書架の前で、自分の専門分野と同時に他の分野の新刊雑誌を当てもなく開くのがそれである。好天の時、外気をいっぱい吸いながら行くのもよいが、渡り廊下のガラス越しに南北両側の雲を見ながらリズムカルに歩くのもよい。新刊雑誌書架の前での立ち読みは、つい長引くと疲れるので、書架の前にベンチが欲しい。もっとも、ベンチがあると、ますます長居をしてしまうという心配も無いわけではないが。

大分前の話になるが、前にいた大学の図書室で、例によって立ち読みをしていた時、偶然見つけた論文に、雷雲から電離層への、つまり、上向きの落雷(?)の最初の論文を見つけたのもそんな時だった。Blue Jets, Red SpritesやElves等と名付けられた上向き落雷の放電形態やそのメカニズムは放電物理学や地球電磁気学の最先端の研究分野として注目されるようになった。

このようなチャンスはOPACやインターネット検索では見つけるのは難しく、そんなことも私の立読み礼賛、他分野の学会誌のパラパラ効果を止められない理由でもあり、ストレス解消法なのである。

さて、やっと一区切りついた。ストレス解消に行こう。ああ、やはりベンチが欲しい!／



図書館に行こう

図書・情報委員会委員 稲元 民夫

(生物資源科学部応用生物科学科教授)

我々ヒトは生命を維持するための基本的な情報を遺伝子に記録し、生きていく上での様々な知識を記録するために脳を発達させ、さらに本という媒体に脳に収めきれない大量の情報を蓄えることにより繁栄を築いてきました。そして近年は急速なコンピュータとIT技術の発達により、何十冊にも及ぶ知識の塊である百科辞典さえ小さなICチップやCD、DVDという電子媒体に記録するようになってきました。皆さんの中にはぶ厚い英和辞典の代わりに電子英和辞典を利用している人も多いことでしょう。英和の他にも和英や国語辞典まで入れて紙の1冊の辞書より薄いのですから、便利になったものです。今日、周りにはパソコンが溢れており、もはやパソコンなしでは仕事ができないという良い状態です。研究で必要な最新情報は電子ジャーナルで即、検索できるし、それ以外の情報だってインターネット上のwebサイトを検索すれば簡単に得ることができます。なにしろ小説だってパソコンで見ることができるようですから。

そんな今、本離れ、活字離れが進んでいるといわれていますが、もはや本は電子媒体に取って代われ、果たして必要なくなったのでしょうか？いやそうではないと思っています。少なくとも私も原稿をパソコンで入力してはいますが、最終的には紙に印刷することを前提にしています。もちろん、そのまま流す電子メールも連絡には利用していますけれども、10数年前に、いわゆるOA化が喧伝された時には、オフィスのペーパーレス化が進むといわれましたが、実際にはペーパーレスどころか、以前にも増して膨大な紙が使われるようになってしまいました。確かに長期保存しておく文書は電子媒体に記録して、場所も取らなくなりました。しかしみんなに回覧する場合や、当座の間使うときには紙に印刷して保管する、といった具合で一向に紙はなくなりませんでした。実はそれ以上に校正の段階で大量に紙を消費しているのです。アルファベットを使う言語はスペルチェッカーだけで文章の校正が可能ですが、日本語のように同音異義の多い言語ではなかなかパソコンの画面上では完璧な校正は難しく、印刷して初めてミスに気がつくことが多いのが原因といわれています。若い学生さん達は適応も早く、慣れればそんなことも少なくなり、ある程度紙の消費量

は減るでしょう。が、微生物と異なり世代交代の極めて遅い我々は、まだコンピュータに完全に適応しているとは言い難く、そうそう紙媒体がなくなることはないでしょう。

それ以上に紙媒体がなくならないであろう、いや無くしたくない理由があります。本誌「図書館だより」の前号で岡野先生が図書館は「考えを深められる場所、別の着想や実験法にいきあたりそうな予感のある場所」と書いておられるのですが、まさに、私は現在進めている研究を大きく前進させるヒントを、なにげなく見ていた本から得た経験があるのです。ある種の細菌の培養法で壁にぶつかり、さんざん苦労していた時期に、気休めに行った図書館で、パラパラとめくっていた本の間からある単語が目飛び込んできました。おやと思って読み進むと、壁を越えられそうな重大なことが書いてあるではありませんか！飛び上がって、実験室に帰り早速、新しい培養法の実験を始めました。そして、以前には決して越えられなかった壁を見事にクリアしたのです。このことが無かったら、今とは別の研究に向かっていたでしょう。これは決して電子媒体ではありえなかったことだと思います。本は目的の文と文の間にはいわゆる「間」がありますが、電子媒体は目的とすることだけを極めて迅速に検索することができるものの隙間はなく、なにげなくとか、目的以外のものというのはでてこないからです。まさに活字は生きてそこにいるのです。

今、本は決して安くはありません。親の負担を考えると本をそうそうは買えないと言う人も多いと思います。そんな人にこそ図書館を大いに使って欲しいものです。皆さん一度は図書館に足を運んで下さっていることでしょう。でもいつも利用していますか。もし利用していないとしたら、その理由はなんでしょうか？使いにくい、本が少ない、いやあのシーンとした雰囲気嫌い、情報はインターネットで得られるからいく必要がないなど、理由は様々でしょう。図書館も皆さんに親しんでもらえるよう、様々な試みをしています。しかし、皆さんに来てもらってリクエストを出していただくのが一番なのです。そう、自分好みの図書館にするためにも「図書館に行こう！」。

利用案内 – 総合目録データベースを使う

"Webcat Plus (ウェブキャット プラス)" の紹介

総合目録データベース とは…

複数の図書館の所蔵データが単一のデータベースに収められているものを指します。国内の大学図書館のほとんどは、国立情報学研究所が管理している、NACISIS-CAT (ナクシスキャット) という総合目録データベースに参加しており、これをWebで公開して、誰でも使えるようにしたものが、Webcatです。

総合目録データベースを検索すると、ある図書をどの図書館が所蔵しているかが、ひとめで分かります。

Webcat Plus とは…

従来のWebcatと、「BOOK」¹⁾ データベースの内容情報を結合したデータベースです。Webcatと同様、インターネットで公開されており、誰でも利用することができます。現在は、和図書のみ提供です。

Webcat Plusでは、こんなこともできます

- 目次情報等もキーワード検索の対象になりますので、ヒットする件数が多くなります。
- 文章で検索することも可能です。
- 「連想検索機能」を使って、「図書の中にある言葉の重なり具合」により、類似の図書の検索をすることが可能です。
- 図書の目次情報、所蔵している図書館の情報にリンクすることができます。

URLはこちら

Webcat <http://webcat.nii.ac.jp/webcat.html>

Webcat Plus <http://webcatplus.nii.ac.jp/>

国立情報学研究所作成のパンフレットを図書館に置いてありますので、どうぞ御活用ください。

* 1 「BOOK」データベースは、図書の目次や、帯・カバーに書かれている内容を収録したもので、(株)トーハン、日本出版販売(株)、日外アソシエーツ(株)、(株)紀伊国屋書店が著作権を有しています。

検索の実際 Webcat

書名や著者名などを入力して、
[検索]ボタンをクリック

検索結果。
書名をクリック。

図書の詳細と、所蔵館の一覧が
表示されます。

<ポイント>

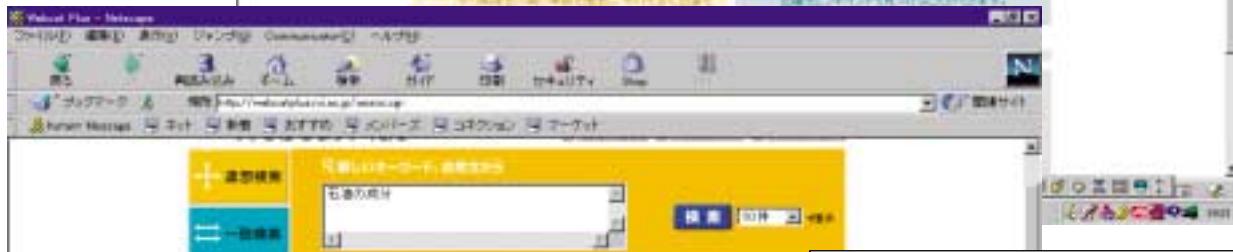
初めから図書のタイトルの全てや一部がはっきり分かっている場合は、WebcatやWebcat Plusの「一致検索」が、キーワードしか分からない場合は、Webcat Plusの「連想検索」が有効です。

必要に応じて使い分けできるように、さまざまな検索を試してみましょう。どちらを使ったら良いか分からない場合は、図書館職員にご相談ください。

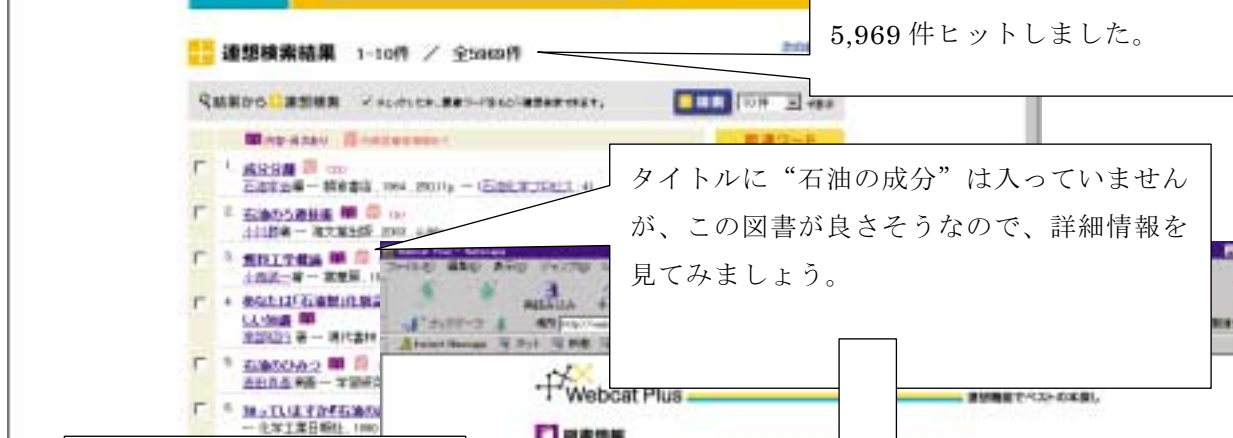
検索の実際 Webcat Plus



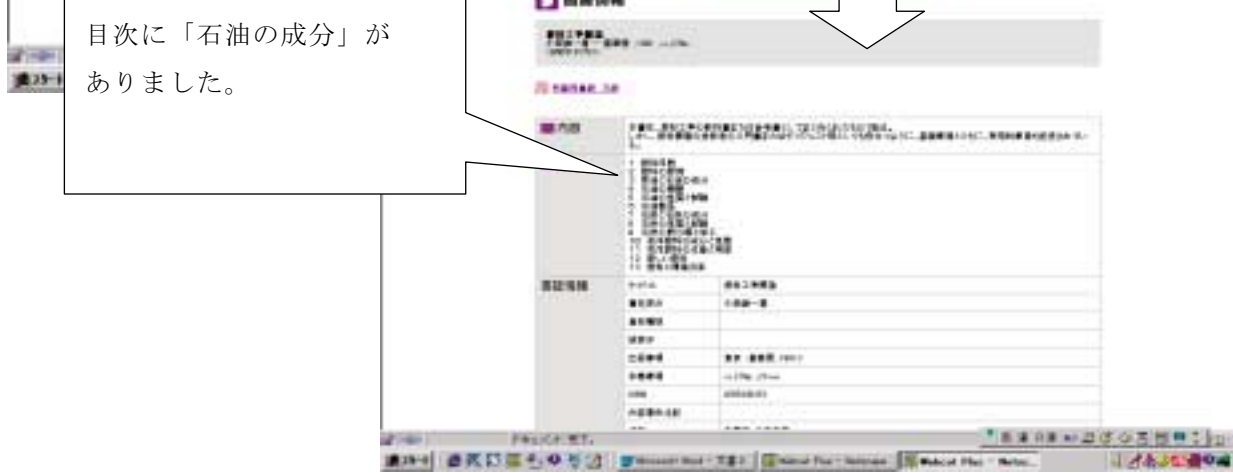
キーワードを入力して、[検索]をクリック。
*キーワードは文章でも可



5,969件ヒットしました。



タイトルに“石油の成分”は入っていませんが、この図書が良さそうなので、詳細情報を見てみましょう。



目次に「石油の成分」がありました。

雑誌の製本作業について

夏季休業中に、雑誌の製本作業を行います。

詳しい日程が決まり次第、キャンパス毎に、別途周知しますのでご注意ください。

作業期間中の利用は次のとおりとなります。

閲覧・貸出 : 製本期間中 及び 事前の準備期間中はできません。

複写 : 必要な論文のタイトル・巻号・ページがはっきりしている場合は、カウンターにご相談ください。

今回対象となるのは、平成12年以前に発行された未製本の学術雑誌で、各学部毎に選定されたものです。一時的な情報提供を主な目的とする雑誌等は、製本対象となりません。どの雑誌が対象となっているかは、各キャンパスのカウンターへお問い合わせください。

<夏季休業中の開館時間>

平日 9:00～17:00

8月29日は休館です。

<無人開館時間>

平日 17:00～22:00

土日祝日 9:00～17:00

* 太字が通常と異なる時間です。

学生の図書の貸出

7月18日(金)の貸出分～

返却期限日: 10月14日(水)

冊数: 10冊まで

雑誌の貸出・教職員は
通常と同じです。

秋田県立大学 図書館だより No.7 2003年7月発行

秋田県立大学 図書・情報センター (URL:<http://www.akita-pu.ac.jp/library/lib.html>)

●秋田キャンパス

〒010-0195

秋田市下新城中野字街道端西 241-7

TEL018-872-1561 FAX018-872-1674

E-mail: a_library@akita-pu.ac.jp

●本荘キャンパス

〒015-0055

本荘市土谷字海老ノ口 84-4

TEL0184-27-2049 FAX0184-27-2185

E-mail: h_library@akita-pu.ac.jp

* ご意見・ご要望等をお寄せください。